

方言研究の推進

はしがき

一九六五年六月五日、大阪市の帝塚山学院短期大学で、「日本方言研究会第一回研究発表会」が開かれた。その席で、私は、右の題目のもとに、すこしの発言をした。今、そのおらすじによって、所見のいくらかを、開陳してみたいと思う。

言うまでもなく、この発表では、私は、私自身を強くむち打ちたいたいと思っている。

方言研究の推進

すべての科学者が、今日よりは明日にと、願いをかけ、夢を描いて、進歩を期している。方言の科学を思慮する者として、私もまた、つねに、進歩を志してはならない。方言の研究を、今日よりは明日にと、推し進めていくことを、考えてはならない。方言研究の推進のために考えるべきことは、一つに研究対象の開拓であり、二つに研究方法の反省である。二者は、二にして一でも

藤原与一

ある。

研究方法の反省に成功すれば、今までの、もののとらえかたを、是正することができよう。また、今まではあつかわなかったもの（あつかうべきことを知らないできたもの）を、進んであつかうようにもなろう。研究法の展開が、旧対象の新しい把握、新対象の新把握になる。

右の意味をくんで、私は、以下に、方言研究推進のための、二三の提言を試みる。（ここに述べることにとどまらないで、さらに多くのことを述べてみたくも思う。しかし、また思うのである。議論よりも実践であると。）

「純粹音声言語としての方言」を研究すべきこと

私は、このせつまたいちだんと、方言は、純粹音声言語として、これを研究していかなくてはならないと思う。

もちろん、人はたいいてい、口頭語の方言を、これまでも、純粹音声言語と見て、研究してきたはずである。話しことばというところえ

かたは、みな、「音声言語」のとりえかただった。が、ふりかえてみると、その音声言語のとりえかたは、かならずしも、純度の高いものではなかった。どうかすると、しぜん、書きことばの見地が導入された。——そこから、話しのことば、音声言語を見ることが、すくなくなかったようである。たとえば、クソウですノー。ととともに、クソーデス ノン。と云う人近畿、紀州例、その「ノン」をとらえては、これを、「ノ」と「ン」とに分けてとり上げたりした。関西の「スズシ ナッタ」(涼しゅうなつた)をとらえては、連体形の「スズシイ」が副詞的につかわれていると説いたりする。方言の現象を、何ものにもこだわらないで、純粹に、音声言語の発現として見るのが、とかく不徹底だったのである。このような趨勢に対しては、私どもは、「純粹な音声言語としての方言現象」を、直視する必要があると、強調しなくてはならない。

方言の研究は、共時的にも、比較論(——すなわち通時論)的にも展開せしめられる。比較論ないし地理学的研究のためには、比較すべきものの理想的なとり上げが先に必要である。それゆえ、方言の研究は、一般に、共時的的研究を基礎とすべきことが考えられる。その基礎で、私どもは、まったく純粹一路に、方言の純粹音声言語をねらわなくてはならない。ものを正しくとり上げることが、すべての方言研究のもと、貴重な出発になる。

私は、先年、津軽方言の調査にしがって、こと新しくも、方言を、まったく、純粹音声言語としてとらえるべきことを痛感した。津軽方言には限らない。広く東北方言を見ても、その真相は、音の微細にまで迫らなくては、とらえることができないのである。南方の琉球方言などに関しても、同じことが言える。

さて、津軽での私の経験によれば、こんなことがあった。クあのね。というような気もちの表現の時、

○アノ シ*[i]*ア。

と云う。「アノ シ*[i]*」の「シ*[i]*」は、「もし」の「し」であろう。——これが、文末の、呼びかけの文末詞である。「あの、もし。」なら、なるほど、クあのね。の意味になるはずである。ところで、その「シ*[i]*」のあとに、わずかな[a]音がついている。わくすれば、聞きのがしめしかねないものである。気づいても、「なんだか、終わりで、口が開くな。」というぐらいいなところがある。しかし、気をつけていると、だんだんに、この種のを多く聞くことができる。たとえば、

○ハッテ マッテ ヘア。

はいつて、待って下さい。(「ハ」は「セ」の転。「セ」は「サイ」の転。「サイ」は「なさい」)。()

と言う。「ハ」で終わってもよいものが、「ヘア」となっている。「ア」が問題である。また、つぎのような例がある。

○ンダ オン シ*[i]*ア!

だもんねえ。

○ソンダ オン ネシ*[i]*ア。

そうですものねえ。

これらは、さきの例と同じように、「もし」の「シ*[i]*」のもとで、「ア」を見せている。

○ヤマサ イ*[i]*ゲベア。

山へ行こうよ。

これでは、さきの「ハ」に似て、「ベ」のもとで、「ア」音が出て

いる。中止的表現の場合でも、こういう音を出す。たとえばこうである。

○ユキ[i] ツモッテアー。

雪が積もってね。

要するに、文表現で、相手に訴えかけると、その末尾に、右のように、特殊の[a]音を随伴せしめるのである。事實は、上記のように、一つの規則的なものとしてとらえられる。いよいよもって、私もは、これを、無視することはできない。考えてみると、これは、文末に必要な、相手への訴え音なのである。——これを、文末訴え音と呼びたい。

津軽で、こういう文末訴え音を耳にしつつ、私は、すぐに、仙台方面、あるいは宮城県下の、

○ハイイー。ナニ[i]ー ツシヤ。

はあい。何ね。(店の主婦が、買ひものに来た幼男に言う。)

などの「ーシヤ」を思いおこした。出雲地方や北陸地方の「ニヤ」文末詞も思いおこした。それらは、「シヤ」とか「ニヤ」とかに聞こえても、もともと、「シア」「ネア」なのだ。文末音[a]のはたらきがみとめられる。右の宮城県下例だと、「何し」「し」は「もし」の「し」の問いかけの下に、文末訴え音の[a]がついたのである。

考えてみると、[a]音が、文末に立って、なんらかの訴えの効果をなうのは、理にかなったことなのである。訴えは、すべて、顯著な形態をとってこそ、訴えの本旨にかなう。(たとえば、クソウです。ヌー[u:]。というような「ヌー」形態は、音の聞こえが顯著

でないから、文末の訴えの要素としては、適當でなからう。) [a]音は、口の開いた、聞こえの効果の大きいものゆえ、文末での訴え効果をなう特殊要素として、出てきてもよかつたはずであらう。

方言の把握としたら、音韻の研究にかぎらず、どの方面の研究の場合にも、実体・実情・真実の把握のために、私もは、方言現象の、その音声形態を、微細にわたって、とらえなくてはならない。その正確と徹底とのために、今は、こと改めて、

方言を、方言の事象を、

純粹音声言語としてとらえる

という言いかたをしたいのである。「純粹音声言語」という、その「純粹」に力点がある。この「純粹」の見つめかたが、もともと純粹で、高く深くなくてはならないと思う。

方言の世界は、純粹口頭語の世界である。そこにはいはって、私もは、出てくる現象のすべてを、もっともしげんに、純粹音として、純粹音の連続としてとらえるべきである。——このさい、純粹音とその連続とが、生きたことばのすべて、生きたことばの事實なのである。純粹音声言語を、それとしてとらえた時が、ことばを、生きたすがたでとらえた時なのである。

文字も何もない、未開民族の言語は、はじめてこれを調査するさい、諸現象を、まったく、音とその連続としてうけとる。純粹音と勝負することが、研究者に要求される。方言の世界に臨んだ場合も、つまり、右の場合と同様にことを考え、同様にものを処理していったらよいのだと思う。書くことを予定しない方言の世界に、書きことばからの類推をもって臨むことなどは、あってならないと思う。

以上の趣旨に関連するものとして、拙稿「津軽方言の研究」——「方言研究」考——がある。（広島大学文学部「紀要」、第二十四卷三号、一九六五年三月）

方法の学問かもの学問か

前項の論旨をうけて、ここでは、ものの学問の重要性を強調したく思う。

方言研究について、いちおう、「ものの学問」「方法の学問」というような判別を試みよう。ものを正しくとり上げることの、いかにたいせつであることか。このところを正しく通りきらなくては、方言研究を、正しく前進させることはできない。さきの文末訴え音にしても、ここまでを処理しなくては、方言の事実を聞いたことにもとらえたことにもならないのであるから、これの正確な把握にまで、「もの」の学問を、徹底させる必要がある。

「もの」の把握は、実体の把握である。方言研究のためには、方言研究にふさわしい、堅固な実体把握がある。

そうであるのに、今日までのところ、もの学問はそこそこにして、方法の学問にほねをおるといふ傾向が、わが方言研究界に、なぐはななかった。この傾向が、今もなお、かなり強いかもしれない。

これは、わが国の方言研究界ばかりのことではないようである。

西洋の言語地理学の、二・三の実践を見たところで言うと、製図にかける資料そのものの整頓に、私などのすぐに感じる疑問があった。たとえば、現地調査の調査員をつかっても、調査員たちの質の高下はまちまちである。これでは、いろいろの質差のある資料があ

がってこよう。調査期間も長い。長い期間に、質のちがった人たちが作業して得たものを、かまわず一枚の地図に排列する。期間については、ある長さはやむを得ないとしても、その長さに対する、言語地理学的な用心が薄かったのには失望した。（長さに対する解釈と、調査をできるだけ短期間作業にしようとする良識とは、つねに必要である。）ある学者は、方言音韻の地理学的調査で、年層のはなはだしくちがう諸対象人物をあつつかい、男女別も無視していた。そうして、々ここでの九十いくつのおじいさんは、ひじょうによい被調査者であった。々などというのである。そのようなあつつかいで、その人は、多くの音韻分布図をつくっており、音素上の、こまかい議論を展開していた。その作品は、学位受領の論文だった。パーの一大学の英語文体論をやる教授の質問が忘れられない。彼は私に、イギリスの方言地理学についての意見を聞いた。調査期間のことを私が問題にすると、彼はそれと同調すると同時に、々調査する人その人の、質もそろえられていなくてはならないのではないか。と切りこんできたのである。

ものを正確に——（あらゆる意味において）——とらえる、「もの学問」に徹底するということを考えた時、私の経験した西洋の方言地理学は、けっしておそろしいものではなかった。どころか、むしろ不安なものだった。西洋の方言地理学、かならずしも進歩してはいない。進歩しているのは、製図学——まさに製図学——かも知れない。

私は、すくなくとも、こう言いたい。「もの学問」を、けっして、そこそこにしてはならない、と。かつて、朝日新聞の「新・人国記」に、こういうことがあった。（昭三九・八・二七）

方言会話の研究

「私は学者じゃない。資料を採集する肉體労働者だ」これが、だれのことばであつてもよい。私どもは、これを頂きたく思う。研究の手だてをくふうする前に、原資料を正しく整頓する肉體労働者になること、これが、方言研究者に必要ではないか。

比喩でなら、こう言える。水を使用する生活のためには、水道管を改良するよりも、湧いてやまない水源を掘ることが、まず大切である。

アメリカの構造言語学を適用して、その方法にしたがつて、日本の方言というものをとらえんとするか。その時も、「水道管なり、水の輸送設備なりを用意して、それに合わせて、水源をたずねる（または掘る）。」ようなことにはならないことに、徹底的でなくてはならないと思う。

研究のために、方法の観念がさき立つことは当然であらう。でも、ものに直到したら、ものために、もの要求する方法を、ものから、聞きとらなくてはならない。今日までに、わが方言研究で、いかに、こと多く、西洋の理論や方法が適用（じつはおしあて）されたことか。おしあててみて、適用の限界を考えたりしたのは、一方から言えば、迂遠なことであつた。非自律的なことだつた。（立場というものは、自律的なものはずである。）

処理法は予定されるとしても、ものにしたがう処理法改訂も、予定されていなくてはならない。この態度で臨めば、つねに、ものが見かた・とらえかたを、新しくしていくことができる。もののとらえかたを新しくすること、とらえてからの処理法を新しくすることとが、つねに一致しているのが理想的である。

さて、ものの、新しいとりあげかたとして、一つ、方言会話の研究があると思う。方言研究は、こういうがわかからも、推進していくことができるのではないか。

方言の現実、会話の現実である。人と人との間で、何かが話されるところに、方言の真骨頂がある。方言は、会話に、生きていく。こう気づいてみれば、方言会話の研究は、もっともあたりまえのことだつた。

では、方言会話というものを、どのようにして研究していくか。ここで、だれでもがすぐに採用していくことのできる一般・合理的な手順を立てることは、容易でない。じつは、このため、今までは、こういう部面の研究が、おき去りにされてきたのだから。しかし、研究の重要さがここにもとめられるとすれば、私どもは、科学的な討究法の発見にとめるべきである。

一つには、方言会話を、会話の中の一人の発言者のみ即して見ていく分析法が考えられよう。このさいは、一発言者の表現の、センチテンスからセンチテンスへの連続の構造が、研究の主対象になる。

二つには、方言会話を、人間対人間のこととして、二者以上の相関の中で見ていく分析法が考えられる。このさいは、彼の一センチテンスに対して我の一センチテンスが出るなどの、対応・索引の「文」（↓「文章」）連続構造が、研究興味の主対象になる。

会話の中の一人の人間の、やや長い話などを素材にしては、その個人のセンチテンス連続構造が問題になるのみならず、その場面の展開が問題になる。場面の展開が分析されれば、それに合わせて、

出現の個々のセンチンスを分類してみることもできる。(去年、瀬戸俊治君は、大学院の演習で、このような試みを發表した。)このさいは、話題による表現の制約いっさいを考慮することの周到さがある。

話す時と書く時とは、私どもの、意識の流れがちがおう。書く時は、じっくりと、物を押さえるようなこちであり、話す時にくらべれば、意識の流れがおそい。話す時は、一般に、意識の流れが、より早くて、かつ、やや乱雑にもなり、一線のでない。こういうことからしても、方言表現の「文章」形態の分析には、書きことばの分析にはとらわれない自由さがあることが、明らかであろう。

方言会話に、個人的習癖のあることは、しばしばみとめられるところである。応答のことば一つにしても、時に、個人的習癖の甚しいものがある。方言会話に、方言的な習癖のあることも、時にみとめられよう。入間ことばなどと言われたものも、一種の、方言会話の地方的習癖と言えるのではないか。方言的習癖の顯著にみとめられるのは、通常、特殊の場合においてばかりかもしれない。また、かぎられた、特定のな方言においてのことかも知れない。そうであっても、なお、私どもは、一般的に、方言には、その方言会話の方言的習癖のありうることを、予定しておくことが、有意義だと思ふ。明確なものがすぐに発見できるかどうかは別として、方言的習癖の存在する可能性は、どこの方言にも、あるはずである。

会話法を、個人に即して見た場合、「反復傾向」は、どののだれにもみとめられる、顕著な事実にはがいあるまい。反復法のはかに、何が、これと並ぶほどに大きな傾向をなしているか。ちょっと、思いよりもつかないほどである。方言の会話には、方言人の、

たくまない、それでいてじつにうまい反復表現が多い。

○カーチャン ココイ イコ。ココガ 11ヨ。

かあちゃん、ここへ行くよ。ここがいいよ。(愛媛県今治郡で。汽車に乗りこんだ母子)

これは幼女の見せた反復表現である。人はしばしば、第一文のつぎに、そのわずか一語をさしかえただけの第二文を、くつきりと光らせる。会話表現の効果の、見すごしがたいものがここにある。

やりとりの、二者間の会話でなら、たとえば狂言の太郎冠者が、主人のことばをくりかえす。一見、機械的なくりかえしが、かえっておもしろみをおこしている。あおしたことも、方言会話に類出することである。

方言会話研究のためには、とにかく、会話例を、相当に長く、記録してみることがよい。第一には録音し、第二に、それを忠実に転写する。その結果を、縦横に解剖し、比較すべき要素・要件は比較して、統合の努力を重ねる。このようなしごとを、いくつもいくつもの、ちがった録音例について、やってみる。それらの作業結果を集成する。こうすれば、なにほどかの、科学的な説明は、かならず実現することができよう。(一つの資料例として、「三重県方言」第一三号 特集「志摩町越賀・和具の会話」をあげておく。)

科学的な説明として、たとえばさきの反復法に関連しても、なんらかの、会話法の型というようなものを明らかにすることができようか。型や傾向や特殊相が、いろいろに見いだされるようだとおもしろい。方言会話ですぐに見られる特性の条々をあげることができ、さらに、方言会話にでなくては見られないような特性の条々をとらえることができたなら、研究は成功と言える。

方言會話の研究は、「生活語としての方言」の、総合的な研究になる。連文法（「文」の連接法）や構文法の研究、直接表現法や間接表現法の研究なども、おのずからここに含まれることは言うまでもない。生き生きとした方言研究が、この方面の研究に、期待されよう。

抑揚の研究

つぎに、私は、生きのよい方言研究のため、抑揚の研究を提案する。この面で、方言研究を推進させることも、私どもの急務だと信じる。

抑揚は、一センテンスまたは二文以上の連続体に、文脈と並行するものとして認定されるころの、イントネーション、「音の高低起伏の波の進行事実」である。

イントネーションという術語を、センテンスアクセントという術語とは、区別する。センテンスアクセントは、文字であり、一センテンスにのみとられるもの。一そういふ、かざられた意味のイントネーションは、文脈上に自由にのみとられるもの、特殊の場合として、連文の領域である。一センテンスにのみとられるものである。（こうしておいて、センテンスに關しては、語につぎアクセントを言い、文につぎアクセントを言う。以下、各目の意義と利用法とは、はつきりとして置かう。）

抑揚そのものは、純乎たるパロールである。しかし、一瞬々々が偶発的に見える、くらげの運動にも、運動の摂理があるにちがいないのに似て、偶発的個別的に見える個々の抑揚にも、その二つ以上にわたる、なんらかの共通因子があるはずである。すなわち、抑揚にも、そのパロールを支えるラングが、そのすぐ背後にあるはずである。不安定そうに見える抑揚にも、じつは骨が通っているはずである。骨がなかつたら、抑揚は抑揚として立つことができない。（——人に、ある意味のもとで、通用するものとはならない。）抑揚に骨が

あり、個々の抑揚に、共通的な因子があるため、抑揚の発現も、多く類型的なものとなる。抑揚の研究は、この類型の把握を主要目的とする。

抑揚の類型は、抑揚の社会的習慣である。それゆえ、これが、方言社会に存立する方言の研究のうえで、重要な研究項目になる。むしろ、多方言にわたって、抑揚類型の比較的、地理学的研究をすることも、興味ぶかい作業である。

抑揚類型の探究把握のためには、個々のパロールとしての抑揚が、的確にとらえられなくてはならないことは、言うまでもなからう。とらえてみれば、個々の抑揚自体、みな、言語表現の生命を反映する、意味の深いものである。この点では、個々の抑揚をとらえることそのことが、すでに抑揚研究の直接目的にもなるはずである。抑揚の記述の重要性（——したがって、抑揚類型の把握の重要性）を、私は、つぎのようにも、説明してみたと思う。

方言の研究を、従来の研究部門別（音韻・文法など）を超えて、新しい心がまえでおこなうとすれば、

意味の研究 抑揚の研究

の二見地で、おこなうことができるのではないか。私は、この二途を考えることが、研究法の新展開になると考えている。意味論は、文法にも、音声音韻にも、語詞語彙にもわたり、それらのすべてに関与する。——言いかえれば、それらすべてを較ぶ。較べて、しかも内在論的見地に立つものである。抑揚論も、直接には話したばの、文法にも音声音韻にも、語詞語彙にもわたるべきものである。そうであって、この方は、形式論的見地に立つ。このように、

二者は同方式のものであって、かつ、表裏関係に立つものである。表裏に見わけうる二つのもの、この二途が、二にして一、必要にしてじゅうぶんな方法だと考えられる。このように考えられる「二にして一」の抑揚研究の重要性は、多く言うまでもなからう。その抑揚研究のいっさいのために、どんな個別の抑揚の記述も、——その記述の一個も、きわめて重要である。

抑揚は、言語表現の感情曲線とも見られよう。未知の人同士も、抑揚で、心を通わすことができる。抑揚は、ことばの意味作用そのものとも言うことができる。抑揚が、生きたことばでもある。

それゆえ、抑揚類型の研究も、ただに形式的なものになつてはならない。表現の表現力・意味作用を確認するために、抑揚類型を求めてこそ、それを求める意義がある。

抑揚類型の探究としたら、はじめに、センテンスの抑揚（イントネーション）——文アクセントについて、類型の探求をしたのがよい。つぎに、特殊構造の二文連結体（たとえば「ハイ。ワカリマシタ。」）についての類型探究におよぶ。

以上、私は、「言語研究」の方法として、「抑揚の研究」を考定する。抑揚研究の開拓が、方言研究を大いに推進せしめることとなるのは、明らかであろう。

むすび

方言研究の推進を主題にして、私は、方言会話の研究や抑揚の研究を強調した。これは、巨視的方向の開拓を言っている。一方、純粋音言語の観点から、方言現象の微細を精密に観察すべきことを

強調している。これは微視的方向である。どちらの方向にしても、分析にちがいない。私どもが、分析を正しく二方向におし進めて、現実の現象の円満な把握につとめる時、方言研究は、方言科学の名にふさわしいものにならう。

日本語の方言に即し、その現実のもの、を、正しく二方向からとり上げるならば、まさに日本語学の名に値する、方言の学問ができよう。こうしてうまれる、方言の、真の日本学が、世界の他国の方言研究にも、よい影響を与えるはずである。

方言研究が推進されて、わが方言研究が、それこそ、世界への文化的影響力を持った「日本の方言研究」、方言科学になることが、願わしい。

(41・4・19)

——広島大学教授——